

●学校の活動シリーズ-3 高崎市立堤ヶ岡小学校

川の子ども新聞

大きくなって帰ってこいよ〜!



「川の子ども新聞」では、川や自然に関する活動をしている小学校を紹介している。3回目となる今回は、高崎市立堤ヶ岡小学校。ふだんから生き物いっぱい堤ヶ岡小に、サケの卵がやってきたよ。さあ、サケの飼育と放流を通してみんなはどんなことを学んだらう?

みんなの中からわき上がった環境に関する気持ちを実行に

堤ヶ岡小学校で行っている環境に関するいろいろな取り組みを紹介するね。

5年生は総合学習で学校周辺を掃除

5年生の総合学習のテーマは「私たちのボランティア」。5年生全員(158人)が4つのテーマに分かれて活動した。その一つ、環境に関するテーマが「地域美化」。道路、公園、新幹線の側道や高齢者宅などの掃除だ。高齢者宅を選ぶときは、自分たちで



高齢者宅の掃除をする5年生

老人会に電話をして打ち合わせをしたんだって。あとは、みんな

6年生は家庭科の授業で「地域で出来る活動」を

6年生では、自分たちで考



公園の公衆トイレもきれいに

稚魚を放流。元気でねー!

3月3日、学校で育てた稚魚をいよいよよ川へ放つ時がきた。「ぼくらのサケを育てる会」が



たくさんの方が参加した「サケの放流」

餌やりと水に気を付けて

大山さんが面倒を見てくれた学校の「サケの卵」は、なんと90%が稚魚になった。ところが、生徒が家に持ち帰った方は半分だった。ほとんど育てたかったり。この差は何? 大山さんに聞いてみると「飼育のポイントには餌をあげすぎないこと。食べ残しを汚す原因になってしまっている。あとは水を換えるとき、水道水を使う場合は、1日汲んでおくといいた

「自分で育てたサケを放流できたのが良かった」「サケがうれしそうに泳ぐのを見て自分もうれい」と笑顔で話してくれた。その後は、みんなで川のゴミ拾い。サケの飼育が、川のことや命のことを考える良いきっかけになったんじゃないかな? 4年後、大人になったサケが帰ってくるのを川をきれいに待っているよ。

サケの卵がやってきた!

メダカ、グッピー、ヤマト沼エビと堤ヶ岡小学校は、生き物がいっぱい! これは近くに住む大山俊次さんが「生き物を通じて豊かな心をはぐくんできてほしい」と願って寄付してくれたものなんだ。子どもたちは休み時間にも水槽のそばに寄り添って、命と触れ合う日々を送っている。

市内の小中学生や希望者にくれた6万粒の卵から育った稚魚を、みんなで鳥川に放流するんだ。朝から稚魚の入ったバケツを手に集まった堤ヶ岡小の代表14人。お互いのバケツに入った稚魚を見ながら色や大きさを比べてたりしてニコニコ。川に向かってそつとバケツを傾けると、サケの稚魚たちは小さな体を元気に動かしながら川の中を泳いで行った。「絶対に帰って来いよ!」「待ってるよ!」と声をかける子どもたち。

◎来年、サケの放流をしようと思う人は次のところへ問い合わせね。

- 僕らのサケを育てる会 TEL.027-361-7604
- 殖連地区自然環境を守る会 TEL.0270-26-4560
- 渡良瀬川にサケを放す会 TEL.0276-73-3076
- 吉岡町子ども育成会連絡協議会 TEL.0279-54-0044
- おおいずみまちサケと遊ぶ会 TEL.0276-62-6713
- 新田町子ども育成会連絡協議会 TEL.0276-57-1111
- 群馬県水産試験場 TEL.027-231-2803

サケの回遊ルート

参考:さけ、ます資源管理センターニュースNo.5(2000年3月)「日本系サケの回遊経路と今後の研究課題」より

過去5年間のサケの遡上数(利根大堰)

平成14年	1090
平成15年	1515
平成16年	1266
平成17年	2283
平成18年	3215

海へ出たあとは、長い旅をして帰ってきます

- 1 雪解け水とともに、海へ旅立ちます。1〜3カ月間、河口近くの海で過ごします。この間に泳ぎ方や餌の取り方を覚え、夏までにはオホーツク海へ向かいます。
- 2 オホーツク海にいるのは秋の終わりごろまで。それから北太平洋西部へ移って最初の冬を過ごします。
- 3 翌年の春になると、ベーリング海へ移って先輩のサケたちと合流。秋までここで過ごします。
- 4 11月ごろになると、ベーリング海からアラスカ湾に移って冬を越します。その後、春になるとベーリング海、冬になるとアラスカ湾と2つの海を行き来します。
- 5 4歳前後になるとベーリング海から千島列島沿いに移動し、9〜12月ごろになると日本沿岸にある、それぞれの生まれた川へ帰っていくのです。

産卵

生まれた川の上流へと向かい、川底にくぼみをつくって、産卵します。

□取材協力/群馬県水産試験場

不思議がいっぱい! サケの一生

卵から稚魚になるまで(群馬県水産試験場の成長記録)

- 1 サケは秋に卵を産みます。群馬県水産試験場では、2006年11月22日に利根大堰(千代田町)でサケの採卵をしました。
- 2 水温によって日数はかわりますが、およそ30日間で卵の中に眼ができます。この状態の卵を「発眼卵」といいます。大きさは直径6mm、重さは0.2gほど。
- 3 孵化直後のサケの赤ちゃんは、おなかに栄養がたくさん詰まったオレンジ色がかつた黄色い袋を持っています。この栄養を吸収しながらしばらくは砂利の中で過ごします。全長2cm。
- 4 おなかの袋は小さくなってやがてなくなります。このころになると、サケは自分で泳ぎだして餌を食べようようになります。体の横にはサケ科特有の楕円模様ができます。この模様は、砂利に似ているので敵から身を守るために役立つと言われていました。全長4cm。
- 5 一日4回、餌を食べるようになります。
- 6 サケは早くも海の生活に移る準備を始めます。それが「銀化」。泳ぎ出すときに見られた楕円形のマークは見えなくなっています。全長5cm。
- 7 全長7cm、体重2gほどになったサケは、銀化もほぼ終了。あとは放流を待ちます。

高崎市立堤ヶ岡小学校「サケの飼育と放流を通して」

学校の活動シリーズ 3